8月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　素材生産協同組合　8月6日

梅雨が明けて今日は広島の原爆の日である。　梅雨が明けても雨が降るが確かに真夏の夕立のような雨になってきている。 但し極端なピンポイント豪雨である。これからの夏はこんな様子が、例年並みになってゆくのかも知れない。
また昨日は株式市場の方でも、1987年のブラックマンデーを上回る株価の大暴落があり今日はまた猛反発で、株価は急上昇した様である。 日銀の利上げにより、徐々に円も高くなってきていて、経済界は大きく揺れ動いているこの頃だが、原木市場は閑散としている。
素生協の市場も、引取が進み空き土場が沢山見える。 つまり製品の動きが良くなり原木がひっ迫してきている。ということだ。 季節の事もあり、原木の入荷は低く抑えられている様だ。
今回の市は、針葉樹は何と1頁のみ、その内件数にして半分は、大径木の売れ残りで掛かっている材はホンの2～3箇所の現場からなのではないかと思う。
　猛烈な暑さで、虫害は少ないが全く無いわけではない。　カミキリムシなどのサイズの幼虫の活動はほとんど見られないが、木口などからも”ソーメン状”のフラスを出す平田キクイムシなどの食害が見られる。 こいつらは穴は小さいけれど、材の中まで食い込み、製材した後でも食害が進む厄介な存在である。 国有林の1件と明細書の6頁で売れ残ったヒノキの柱とスギ中目はこの虫害が原因であろう。 市場の方でも国有以外は売値の交渉をして何とか売ろうと努力したが、残った。 虫害の中でも”ピンホール”と呼ばれるこの穴は致命的な様だ。
　大型のカミキリムシ類の虫害はまだほとんど見られないが、卵は既に産み付けられて居るのでこのままで済むはずがない。秋までには虫害が始まるだろう。
こんな時強みを見せるのが、土木用材を生産している買い方である。
主に生産しているのは、土留めの板(ヤイタ)である。 これは穴が開いて居ようと、面積を確保出来れば、構わない。 但し公共工事などで適正価格が決められているから、そこから逆算すると高くは買えない、薄利多売の商売で、建築用材を生産する業者とは一線を隔する。
　上毛新聞の記事で”花粉症”の記事のシリーズの第2弾の3回目に小井土製材が載っていた。
今日会えたので話を聞いた。 やはり造材に話が及んだ。
「プロセッサーで造材する場合木口などはよく見ないから、判で押したように元口が少し曲がった物などは、皆2.0mに伐ってバイオ燃料になってしまう。 あと50cm長く伐ってもらえば燃料にならずに海外に輸出する道もあったのに。」と残念がる。　小井土社長も私と同じ様に”木材を安易に燃料に使う事には抵抗がある様だ。 燃料にするために植林された木は1本たりとて無いのである。
その点海外に販路を開拓されたのは大きな功績で、今まで国内需要だけに頼ってきた国産材の大きな転機と思われる。
　かつて県森連で飯塚会長の頃、職員旅行で上海に行ったことがあったが、この時私だけは観光無しで会長と、木材情勢を見て回った事があった。
中国は木材資源は乏しい国だ。その為世界中から輸入された木材が、安い値で縦横無尽に取引されている。この際日本の木材を売り込んだ事があったが海外に販路を求めることがいかに難しいか思い知った物だった。
かつて輸入材に蹂躙されてきた日本の木材が、アメリカで人気が出るとは、隔世の感がある。

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　8月7日

こちらの市も閑散とした市だ。やはりニッパチと呼ばれる経済停滞の季節だ。

毎年2月と8月には市場は停滞する。

2月に停滞するのは、決算を控えて仕入を控え、売り掛けを回収する時期なのだと、思っている。

8月の停滞は木を伐るには適さない季節で虫害が懸念されるため、木材生産がが減る事と

買い方側も必要以上の仕入を避けるため、と私は解釈している。

株式市場の大騒ぎもここまでは届かない様だ。

ただし！まったく影響がない訳にはゆかない。

今回の株式市場の乱高下は、日本とアメリカの利率操作に端を発している。

日本からアメリカ向けの2×4材の輸出も、ジワリと進む円安挽回の動きが今後どのように

展開するか注視したい。 ただ日本産の2×4材とアメリカのそれでは、まるで精度が違うとの事だ。

日本国内に流通させている2×4材は寸法精度や含水率に厳しい規格がある。

もう一つ懸念されるのは、日本の利率が上がって行く事で、住宅の着工数がますます減る

懸念がある。　今は平屋の小さな住宅が流行とは言え、日本の住宅は、まず土地探しから

始まり、建物のプランも施主の仕事である。 もちろん住宅メーカーが手伝ってくれるが、土地を

買うのも、建物を建てるのも施主のローンに依る訳で、元々敷居が高い。

アメリカはと見ると、家は出来ているのを買う物で、引っ越す時はその家を売って引っ越し先に

家を買う。 不動産会社は宅地を売るのではなく、有り余る郊外の砂漠に水を引き、宅地を造成し

そこに”こじゃれた”家を並べて街を作ってから家を売る。 郊外の砂漠にパッチワークの様に住宅街

が出来てゆく。 日本では持ち家を持ってしまうと、中々引っ越しはむずかしくなるが、アメリカでは

アパートを引っ越すように、家を買い変えては移り住む。

狭い島国で土着性の強い日本人と、開拓しながらアメリカ全土に移動をしていったアメリカ人

との国民性の違いはあるだろう。 家の建て方も2×4工法が主流で、決して日本の様に重厚な

物では無い。 日本には日本の建築があり、アメリカには全く発想の違う建築がある。

中国も又しかりで、木材資源があまり豊かとは言えない国には、それなりの建築がある。

かつて中国で世界の木材流通を目の当たりにした時、日本の木材が余りにもガラパゴス化しているのに

愕然としたのは、もう30年も前の話である。 この頃は日本は輸入材が幅を利かせていて、中国からも

輸入しようとした頃で、中国から **「日本は森林資源が豊かなのに、これを温存して輸入するのか？」**

と聞かれて驚いたものだった。今や国産木材も世界市場に参入出来る環境が出来つつある。

そろそろ世界の規格を研究するべき時かもしれない。もちろん買い方と協力しての事だが･･･